

翻訳にあたってのヒント

その 61

「おぼろ（朧）とかすみ（霞）」 & 「きり（霧）ともや（靄）」

今回の話題はあまり英語の勉強にはならないが、言葉の違いは翻訳にとっては重要な点でもあるので、これらの違いについて書いてみることにする。

「♪さくら さくら …霞か雲か…さくら さくら 花盛り♪」は『さくらさくら』の歌詞、『おぼろ月夜』は「♪菜の花畑に入り日うすれ…♪」で始まる。では、この「かすみ（霞）」と「おぼろ（朧）」とは一体何のことだろう。実は「霞と朧」は、同じ気象現象であるようだ。ところが、気象学的にははっきりと定義されていないため、気象用語としては使われられないらしいが、日中にたちこめるのが「霞」で、夜間に発生するのが「朧」と時間によって使い分けられているようである。また春に発生するものを「霞」、秋に発生するものを「霧」として区別することもあるようだ。さらに、「霞」の定義として「空中に浮遊する微細な水滴やちりが帯状に集まった、うっすらと薄い雲のようなもの」ともある（出典：明鏡国語辞典）。このことから、英語にすればどちらも”a haze” or “a hazy sky”あるいは”a mist” or “a misty sky”ということでもいいだろう。

似た言葉に、「霧（きり）」と「靄（もや）」がある。同国語辞典によれば、地表や水面近くで煙のように立ちこめるものが「霧」で、大気中に無数の細かい水滴が浮遊し、遠方がかすんで見えるものが「靄」とある。こちらは、気象用語としても使われていて、きちんと定義づけられており、「物の形がわかる距離（視程）が一キロメートル未満だと霧」、「一キロメートル以上遠くの物の形がわかるようであれば靄」、というように区別されている。つまり、見通しが悪い方が霧ということになる。靄の一般的な英語は霞・朧と同じく”a haze” or “a mist”で、霧の場合は”a fog”。

これらの「霞・朧・霧・靄」は、大気が存在しなければ、観測されない現象であるが、土星で最大の衛星であるタイタン（Titan：土星の衛星中最大で大気をもつという土星の第7衛星）には、靄が観測されているそうである。ただし、その靄は地球のものとは違い、大気の成分である窒素や炭化水素の化学反応によって発生するものだそうだ。

季節柄、おぼろにかすむ春の宵に宇宙の彼方へと思いをさせ、そんなおぼろ月夜を見ている地球外生命体がいるかもと、ぼーっとするのも一興である……。

以上これにて、第 61 回目おしまい。